

## 原著＜論文＞

領域「表現」における自然音に意識を向けた指導の一考察  
—音環境と音の記憶についての視点から—

扶瀬 絵梨奈\*1

## 1. はじめに

2017（平成 29）年 3 月に文部科学省より告示された幼稚園教育要領（第 5 次改訂）では、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、第 1 章で ①知識及び技能の基礎、②思考力、判断力、表現力等の基礎、③学びに向かう力、人間性等を一体的に育むよう努めることが示されている。これらは第 2 章において、幼稚園教育のなかで育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えた「ねらい」、それらを達成するために保育者が指導する「内容」、そして幼児の発達を踏まえた指導を行うにあたって留意すべき「内容の取扱い」として具体的に明示されており、感性和表現に関する領域「表現」では、2008（平成 20）年告示の幼稚園教育要領（第 4 次改訂）に対し、「内容の取扱い」の（1）および（3）に改訂が加えられた。（1）では「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」、（3）では「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」という一文がそれぞれ付け足されている。こうして子どもの姿へ丁寧に寄り添いながら幼児の感性を育む職能に置かれている保育者自身は日頃どれほどそれらの音に耳を澄ませ、意識を向けているのだろうか。

## 2. 音へ向ける意識について

八板（1988）が『日本人の音意識』のなかで「日本の演劇には虫の声や小鳥の囀りなどの効果音が数多く用いられていることに気付く。（中略）それは、私たちが効果音にさまざまな意味を持たせることができるということであり、効果音を聞いてその演出意図を汲み取ることができるという感性を持っているからなのである。それだけ想像力に長けているということである。」と述べているように、私たちは鶯の声に春を覚え、梅雨には雨の音に自然の豊かさを感じ、蝉の鳴き声とともに夏を迎え、自然の中にある様々な音を通して季節を感じていることに気付く。八板によれば、これらの感情は他の民族にはみられない日

---

\*1名古屋柳城短期大学

本人独特の感覚だとし、西欧人は工場の騒音と同類のノイズとして認識しているという。

一般に「きくこと」を日本語として表す場合、音や声を耳に感じ取る「聞く」、注意して耳にとめる「聴く」などと表現できる。また、そのように感じられることを「聞こえる」「聴こえる」と表現したりもする。英語ではこれらの差を **listening** と **hearing** として表現し、前者を能動的に意思をもって聞く音、後者を受動的または無意識に聞く音として区別する。また「聞（聴）く」と「聞（聴）こえる」の差は、注意の機能が関係していると思われる。人間は、純音（1 つの周波数の正弦波から成る音）と、生活の中で大多数を占める複合音（周波数の異なる純音が重なりあったもの）を音の成分として認識し、楽音、物音、雑音などが混在するなかで生活しているが、それらに選択的注意を成立させることができる。この現象を認知心理学ではカクテルパーティー効果と呼び、複数の情報から必要な情報を選び取る注意が機能している。つまり、聴覚機能としては聞いている状態であるものの、聞いていない心理状態が生み出されるということである。たとえば BGM の流れるレストランで他者と会話する場合、相手の声は意識的に「聞いている=**listening**」状態であり、BGM は無意識下において「聞こえている=**hearing**」状態となる。どちらも同じ音量であったとしても、注意を向けなかった情報は失われる。またその反対に、これまでは気にしていなかった風の音や足音が、注意を向けた途端に音として聞こえ始めるということもある。

日常生活のなかで、風の音や雨の音、自然の中にある音とは多くの場合、聞こえてはいないが無意識の状態であることが多い。第 5 次改訂の幼稚園教育要領に示されているように、幼児が「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付く」ためには、本来 **hearing** として聞こえている音を、保育者としては **listening** している必要があるのではないか。また、保育者養成課程に在籍する学生は自然の中にある音についてどんな嗜好や記憶をもっているのだろうか。本稿では、保育職を志す学生の「自然音」に対する記憶や意識についての基礎的知見を得ることで、領域「表現」における音に意識を向けた指導の在り方についての検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

倫理的配慮を口頭で説明した上で、下記のとおり調査を実施した。

- ・対 象：保育者養成短期大学に在籍する学生 148 名（1 年生）
- ・実施日：2017 年 7 月

- ・調査内容：音環境および音の記憶に関する事柄について

調査事項は次の4項目である。

1	あなたの記憶にある中で、「最近心地よく感じた自然音」は何ですか
2	あなたの「嫌いな自然音」は何ですか
3	あなたの記憶にある中で、「最初にきいた自然音」は何ですか
4	音楽が好きですか

調査時、学生からは「自然音についてこれまで深く考えたことはなかった」、「自然音を意識して聞いたことはなかった」という声が多数聞かれた。音や音楽に溢れる現代の日常生活で、自然音に注意を向ける機会は多くないことが推測できる。それぞれの自然音については回答項目を以下のとおりとし、複数回答可とした。

A	鳥や虫の鳴き声	E	木の葉のそよぎ音
B	風の音	F	波音
C	川の流れる音	G	土砂の音
D	雨の音	H	その他

まず、学生が最近心地よく感じた自然音についての結果を図1に示す。

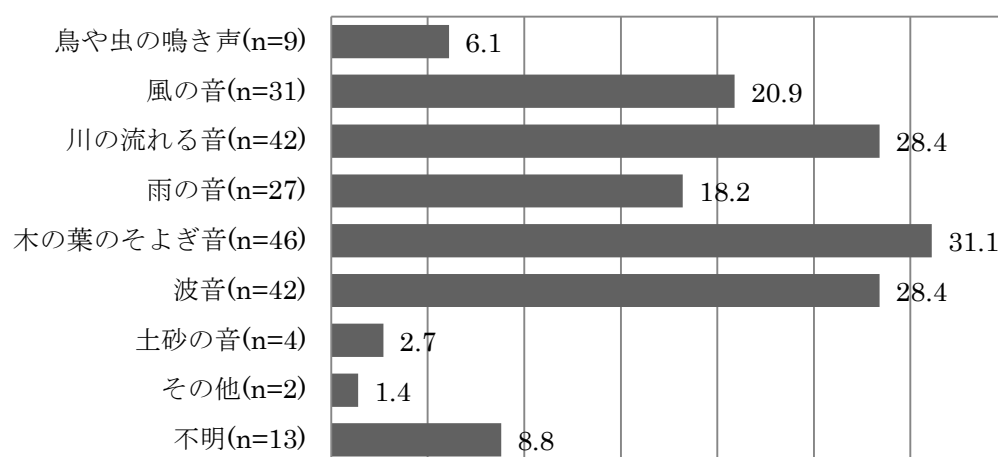


図1. 最近心地よく感じた自然音

心地よく感じた音として最も多く挙げられていたものは「木の葉のそよぎ音」であった。

続いて「川の流れる音」「波音」、そして全体のおよそ 4 分の 1 にあたる学生が「風の音」に心地よさを感じていた。風とは、地球の表面に対する相対的な空気の運動を指し、一方向に流れるものであるため風そのものに音はない。風音は、空気の流れが物体に当たることによって生じ、つまり風が木に当たれば「木の葉のそよぎ音」になり、波に当たれば「波音」となる。この結果が示すものは、学生自身が「思い返すなかで、心地よいと感じた自然音がある」、さらには「風には心地よい音がある」という経験を得ていることである。また、上位 4 項目は全て「風」により発生する音であった。

次に、嫌いな自然音を図 2 に示す。

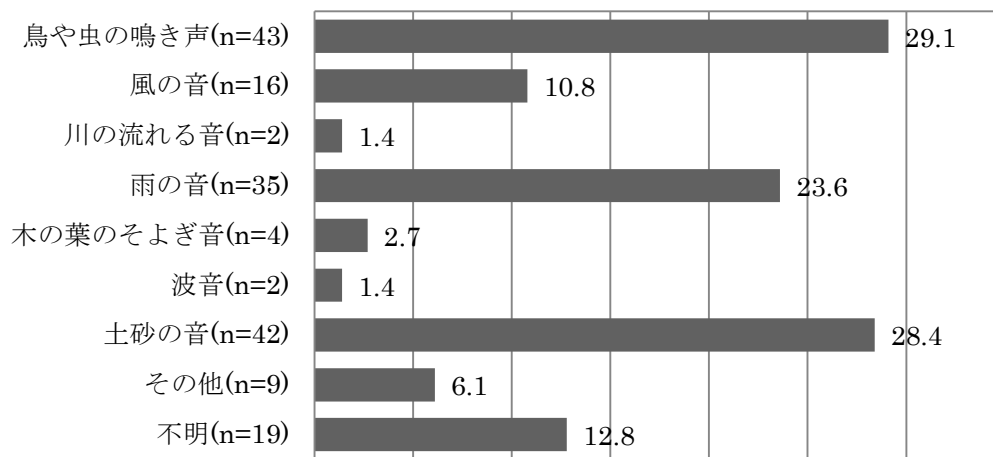


図 2. 嫌いな自然音

「鳥や虫の鳴き声」と「土砂の音」は、心地よく感じた自然音（図 1）でポイントが低かった項目であり、嫌いな自然音の値には有意差として表れている。ここで注目すべきは、続く「雨の音」である。心地よく感じていた学生を 5.4 ポイント上回り、全体の 4 分の 1 以上の学生が嫌いと答えた。雨という天候に対する憂鬱さを感じる心理状態も関係しているであろうが、しかしながら自分自身が嫌いと感じる音への気づきを子ども達へ促すことができるような環境を構成できるだろうか。3～5 歳児を対象に行われた音の聴取・表現力と行動特性（好奇心）に関する先行研究においては、音の聴取・表現力が豊かな幼児は好奇心が強いという傾向が 3 歳児に顕著に見られることが明らかにされている（立本 2011）。立本はこの研究によって、低年齢の時期から音を聴こうとする好奇心や表現力の発達が始まっており、与えるだけの音や既製楽器のみがある環境ではなく、日常生活の自然な流れ

の中で音を聴取したり表現したりできる物的環境づくりがいかに大切であることを示している。学生自身が嫌悪を感じる自然音については保育者養成の教育課程のなかでも留意が必要であり、知識の集積のみに留まることなく、それらの音への気づきが子どもの発達の姿とどう結びついていくのかという学びが重要であると考ええる。

続いて、学生の回答から得たこれらの結果が幼少期の自然音の記憶と関係しているのかを調査するため、学生が最初に聞いたと記憶している自然音を調査した。

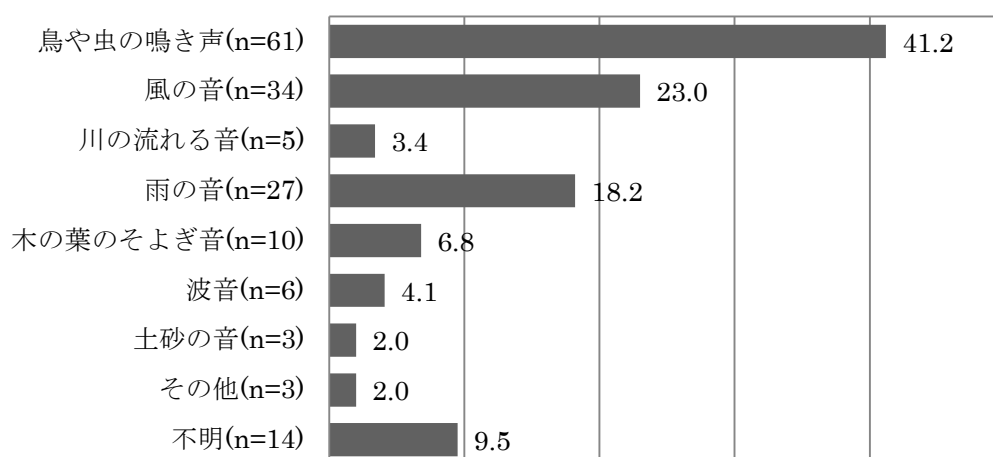


図3. 最初にきいた自然音

全体の9割を超える学生が、自分が最初に耳にした自然音について記憶があるとし、うち4割の学生が「鳥や虫の鳴き声」と答えた。また、心地よく感じていた「木の葉のそよぎ音」は全体の6.8%に収まり、人生でもっとも長い期間聞いているはずの自然音と、現在心地よく感じる自然音とは全く一致しないことが分かる。「川」、「波」、「土砂」など物理的に幼少期には傍に常時あるとは考えにくい項目を除外すると、もっともポイントが低かった項目は「木の葉のそよぎ音」であり、風が当たることで生じるそよぎ音と「風音」を学生は別物として認識していることが分かる。

最後に、音楽の嗜好との関係性を調査した。調査項目「音楽が好きですか」と「最近心地良く感じた自然音」とのクロス集計の結果を図4に示す。

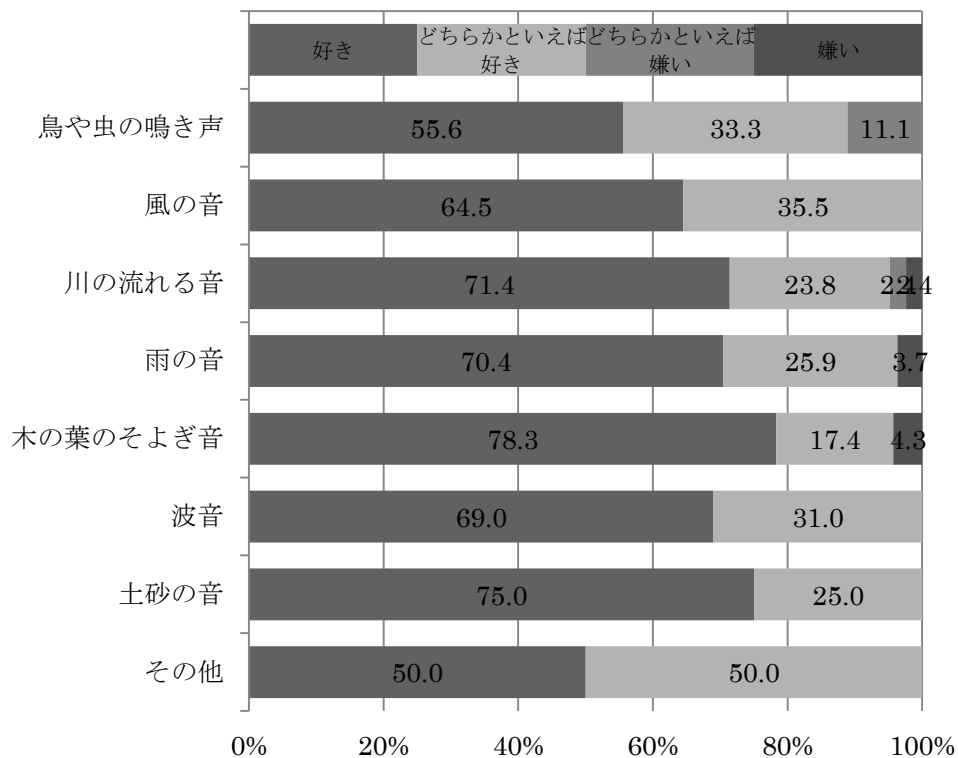


図4.「音楽が好きですか」と「最近心地良く感じた自然音」のクロス集計

音楽が好きだと答えた学生の特徴としては、「鳥や虫の鳴き声」に心地よさを感じるという点に大きな特徴がみられた。（「土砂の音」にも同様の現象がみられるが、n 数が 4 と少ないため、今回の考察では除外する。）鳥や虫の鳴き声と、今回の項目に挙げたそれ以外の音の差は、鳥や虫の鳴き声は唯一、音に音程をもつということと、鳴き声にリズムを感じられるということである。これは音楽における音程やリズムに親しんでいることが、自然音に心地よさを感じられる現象と関係していると推論できる。

#### 4. まとめと今後の展開

「聞く音」と「聞こえる音」、そして「聞かない音」を無意識のうちに選択しているからこそ、私たちは平穏に日々を過ごしているのかもしれない。地球上に存在する全ての音を同時に“listening”できてしまうなら、煩雑な音が気になり、日常生活を保っていただろう。しかし普段見聞きしない音や風景のなかにも、美しさや感動の種があることを、忘れないでいたい。

今回の研究において、学生は自然音に関する幼少期の記憶が確かにあり、風や雨の音に耳を澄ませた経験があることが分かった。また、音楽が好きだと答える学生ほど、音に音程やリズムをもつ自然音を心地よく感じる傾向があることが明らかとなった。しかし音に溢れた現代において自然音を聴こうとする機会は多くはなく、まずは保育者養成課程に在籍する学生自身が自然の中に存在する音に気付くことで、表現技術をより増幅させ、子どもの豊かな感性や表現しようとする力を養っていく必要がある。そのためには「聴（聞くこと）」や「聞こえること」に対する意識が促進されるような教示を展開していかなければならない。

立本（2010）は「音は一瞬にして幼児の中に入り、一瞬にして消えていくものである。しかし幼児の中に入ってきた音は、その存在が外界になくなってしまっても、幼児の心やイメージの中で感受され、それによって豊かな表現が生まれる。そして、その思いの上限には、幼児の個性や可能性が多く含まれているのである。」と述べている。幼稚園教育要領の領域「表現」に関する内容の取扱いについて、音楽によって子どもの感性を育むことに加え「音」への気付きの一文が新たに加えられたことは、私たち日本人にとってある種の美しさを尊重している気さえする。風には音があること、雨には季節があること、花の色には様々があること・・・それらを知った子どもたちは感性豊かに四季を愉しみ、生きる力を蓄えていくだろう。

今後はこれらの結果を踏まえ、隣接する領域にも着目しながら研究を進めていく。自然音を表現するための言語や、子どもが環境と関わるなかで展開していく表現力と音・音楽の関係に注目していきたい。

## 5. 参考文献

- 岩宮眞一郎，笠松広司，北川智利，金基弘，積山薫，高木創，2014，『視聴覚融合の科学』（音響サイエンスシリーズ 11），日本音響学会。
- 立本千寿子，2011，「幼児の音の聴取・表現力と行動特性—「聴く・つくる」活動を通してみる幼児像—」，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科，『教育実践学論集』12号，pp. 113-125。
- 廣谷定男，笥和彦，辰巳格，皆川泰代，持田岳美，渡辺眞澄，2017，『聞くと話すの脳科学』（音響サイエンスシリーズ 17），日本音響学会。

文部科学省，2008，『幼稚園教育要領』

文部科学省，2017，『幼稚園教育要領』

八板賢二郎，1988，「日本人の音意識」，日本音響家協会，

<http://www.seas.or.jp/news/library/tsunoda.html>（2018/05/03 閲覧）

淀川英司，東倉洋一，中根一成，1998，『視聴覚の認知科学』 東京：電子情報通信学会．



要旨

A Study of Teaching with Consciousness on Natural Sound in Region of  
"Expression":

From the Viewpoint of Sound Environment and Sound Memory

Erina FUSE

本論文では、第5次改訂である幼稚園教育要領（2017）の領域「表現」における内容の取扱いとして新たに加えられた「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」について、気付く（音をきく）という行為に着目し、自然音に意識を向けた指導の在り方について検討することを目的とした。様々な音を受容している現代の日常生活のなかで、自然音に気付く機会は学生にとって多くはなく、保育職を志す学生の「自然音」に対する記憶や意識についての基礎的知見を得るために音環境および音の記憶に関する調査を行った。学生は自然音に関する幼少期の記憶が確かにあり、風や雨の音に耳を澄ませた経験があることや、音楽が好きと答える学生ほど、音に音程やリズムをもつ自然音を心地よく感じる傾向があることが明らかとなった。

今回は保育者養成短期大学の1年次に在籍する学生を対象に調査を行ったが、教育のなかで「聴（聞）くこと」や「聞こえること」に対する意識が促進されるような教示を展開したのちに、音への好奇心や探究心がどう高まるのか、隣接する領域にも着目しながら研究を進めていきたい。

**キーワード**； 領域表現 音楽表現 保育者養成 幼稚園教育要領